

会 議 録

- | | | |
|---|---------|---|
| 1 | 会 議 名 | 第3回 旧門司駅関連遺構等の展示方策等検討懇話会 |
| 2 | 会 議 種 別 | 市政運営上の会合 |
| 3 | 議 題 | 構成員による意見交換等（事務局説明後、意見交換） |
| 4 | 開 催 日 時 | 令和7年10月17日（金）13時30分～15時15分 |
| 5 | 開 催 場 所 | 北九州市庁舎 3階 特別会議室 A
（北九州市小倉北区城内1-1） |
| 6 | 出席者氏名 | 別添「出席者名簿」のとおり |
| 7 | 議 事 概 要 | 事務局より、第2回の構成員からの意見をもとに作成した展示手法の検討、出土品の活用方法について説明し、各構成員より、文化財や土木、建築、歴史の専門的知見に加え、観光や若者、郷土史など様々な観点から意見を聴取した。 |
| 8 | 会 議 経 過 | 下記のとおり |
| 9 | 問い合わせ先 | 都市戦略局都市再推進部事業推進課再開発係
電話番号 093-582-2469 |

第3回 旧門司駅関連遺構等の展示方策等検討懇話会 出席者名簿

1 構成員（敬称略）

分野	所属・役職等	氏名
地元	門司郷土会 会長	銭谷 十九雄
	門司郷土会 幹事	内山 昌子
歴史	北九州市文化財保護審議会 会長	永尾 正剛
地域活性化	北九州市立大学地域戦略研究所 教授	南 博
鉄道・土木史	(公社)土木学会 フェロー会員	小野田 滋
展示	九州鉄道記念館 館長	松本 博文
観光	(公財)北九州観光コンベンション協会 専務理事	小石 富美恵

近代建築史	北九州市立大学建築デザイン学科 講師	山田 浩史 ※当日は所用のため欠席
若者	北九州市Z世代課パートナー（社会人）	一ノ瀬 歩美 ※当日は所用のため欠席
若者	北九州市Z世代課パートナー（大学生）	足達 凜花 ※当日は所用のため欠席

2 北九州市

所属・役職等	氏名
都市戦略局都市再生推進部長	正野 睦朗
都市戦略局都市再生推進部事業推進課長	近松 芳朗
都市ブランド創造局総務文化部埋蔵文化財担当課長	原田 智也

(会議経過)

1 開会

(事務局)

定刻になりましたので、第3回旧門司駅関連遺構等の展示方策等検討懇話会を始めます。本日の司会を務めさせていただきます、北九州市都市戦略局事業推進課長の近松と申します。よろしくお願いいたします。

本日は会場に6名、オンラインに1名の委員の皆様にご出席いただいております。

それでは開会にあたりまして、北九州市都市戦略局都市再生推進部長の正野睦朗よりご挨拶を申し上げます。

2 都市再生推進部長 挨拶

(都市再生推進部長)

改めまして、都市再生推進部長の正野でございます。

「第3回 旧門司駅関連遺構等の展示方策等検討懇話会」にご出席いただき、誠にありがとうございます。

今回が、懇話会としてはいよいよ最終回となります。これまでの間、地域の歴史や文化を未来につなぐという共通の目標のもと、皆様の専門的な知見をいただき、大変実りある議論ができたと感じております。深く感謝申し上げます。

前回の懇話会を振り返りますと、遺構出土品の本質的な価値を正確かつ分かりやすく表現すること。それから、子どもたちや知識がゼロの方々に興味を持ってもらえるような展示。それから、展示空間全体でのブランディングが必要なのではないか。それから、商店街や鉄道記念館、周辺の施設との連携も大事ではないかといった示唆に富んだご意見を頂戴しました。

本日は、これらの意見を踏まえて、第2回にも提示しましたけれども、さらに内容を加味しまして、皆様に改めて案としてご提示したいと思っております。

委員の皆様におかれましては、より良い展示計画となりますよう、本日も忌憚なく、率直かつ建設的なご意見をいただければと思います。限られた時間ではございますけれども、有意義な会となりますように、よろしくお願いいたします。

(事務局)

それでは配付資料の確認をさせていただきます。最初に議事次第、次に構成員名簿、配席図、資料といたしまして、旧門司駅関連遺構の展示・活用方策(案)となっております。資料に不足はございませんでしょうか。なお、本懇話会は開催要項第四条に基づき、一般の方や報道関係の皆様のご傍聴可としており、後日、

会議録を北九州市のホームページで掲載いたします。

さて、前回ご都合により欠席でございました 公益財団法人北九州観光コンベンション協会 小石 富美恵様に会場にご参加いただいておりますので、改めてご紹介申し上げます。また北九州市立大学建築デザイン学科講師 山田 浩史様、北九州市Z世代課パートナー 足達 凜花様は本日所要のため欠席となっております。また、北九州市Z世代化パートナー 一ノ瀬 歩美様も本日急遽ご欠席となっております。

それでは早速議事に移りたいと思いますので、これからの進行は座長の南様にお願いしたいと思います。

3 構成員による意見交換等（事務局説明後、意見交換）

（座長）

先ほど部長の方から、今回が懇話会としては実質的に最後の会になるであろうということでご発言がございました。私どもとしましては、本日も忌憚のないご意見を、市に対して各構成員からお示しをいただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

進め方としては、第1回、第2回と同様に、最初に事務局から説明を受けまして、それをもとに、お一人ずつ、順番にご発言をいただきたいと思います。ご発言いただく順番ですが、事務局の説明の後、まず初めにオンラインでご参加いただいている小野田さんにお話をいただいて、その後、永尾さん、銭谷さん、内山さん、松本さん、小石さんの順にご発言いただき、事務局から事前に意見をまとめていただいている山田さんと足達さんのご意見をご紹介いただくといった流れで進めさせていただきたいと思います。そしてその後、また追加でご意見いただければと考えておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

それでは事務局より説明をお願いします。

（事務局）

事務局よりご説明させていただきます。資料 旧門司駅関連遺構の展示活用方策（案）をご覧ください。

まず1ページ目です。第2回懇話会でいただいたご意見のうち、主だったものをご紹介させていただきます。第1に遺構・出土品の本質的な価値、特徴的な部分や時代性、史実を正確に伝わりやすく、かつ分かりやすく表現すべきとのご意見をいただきました。第2に子どもたちやゼロ知識の方にも興味を持ってもらえる展示とすべきというご意見、第3に展示空間全体が遺構のブランディングに寄与するようなデザインイメージとしてはどうかというご意見をいただきました。第4に、遺構の床上・床下の展示の見せ方、そして温湿度、光の管理を検討すべ

きというご意見、最後に周辺施設と連動したコンテンツの打ち出しについてご意見をいただきました。

次のページをご覧ください。切り出した遺構が移築であることをどう表現していくのか、分かりやすい展示や子どもたちやゼロ知識の人にも興味を持ってもらえる展示という点を検討いたしました。まず旧門司駅関連遺構が切り出しという形で移築されたものであることをどう表現するか。そして切り出した遺構がもとどこにあったのかを分かりやすく示すという点でございます。各時代の遺構と複合施設の立体構造を3Dで表現し、遺構がどこから切り出されたのか分かりやすく示します。具体的には3DCGによる映像や複合公共施設の構造模型を利用するなどの方法を考えております。次に、子どもたちやゼロ知識の人にも興味を持ってもらえる展示の方法についてでございます。ここではゲーム形式での展示等を検討しております。例えばゲームの中で、パズル形式で発掘作業を体験してもらいながら遺構から明らかになった往時の歴史、産業、景観、人々の暮らしについても知ってもらえるようなきっかけづくりになればと考えております。

続いて3ページ目をご覧ください。展示空間全体が、遺構のブランディングに寄与するようなデザインイメージという委員のご意見を受けて、展示空間全体における遺構のブランディングを通して展示に興味を持っていただくことを目指してまいります。遺構ブランディングウォールを作成するなど、まずは空間でのアプローチを検討いたします。エントランスホールから入ると、まず展示コーナーが広がり、そこから市民ロビーへとつながっております。展示コーナーでは再現展示ウォールにイギリス積みのレンガを表現するなど、積み方も展示の一種として利用したいと考えております。市民ロビーや利便施設には遺構ブランディングウォールの中にタイムウィンドウを設置し、過去と未来を旅する窓として来場者の興味を引きつけます。これらのタイムウィンドウを効果的に配置することで、来場者はもちろんのこと、外を歩く方にもアプローチできないかを検討してまいります。

続いて4ページをご覧ください。こちらは旧門司駅関連切り出し遺構の展示方法に関するこれまでの懇話会でいただいた構成員の皆様からの貴重なご意見をまとめたものでございます。切り出した実物の遺構の展示にあたり、床上・床下展示について、次の三つの観点から改めて皆様にご意見をいただきたいと考えております。まず一つ目は遺構の価値の伝わりやすさです。これまでの意見では、海岸線の波打ち際に作られた構造物であることや、基礎構造が部分部分で違うことを分かりやすく伝える重要性が指摘されております。また、木杭と胴木による基礎構造を通じまして、近世と近代の技術の融合を実感できるような展示も重要な視点として挙げられております。二つ目は展示空間の演出でございます。この点に関しましては、床下展示では、時代の変遷をリアルに感じ、実体感が表現でき

る。床上展示では、構造を目の高さで体感できる表現の仕方になるといったそれぞれのメリットが示されております。そして三つ目は、遺構の温湿度管理、光の管理、メンテナンス性です。この観点では床下展示においては水滴による視認性の問題が指摘されております。また、文化財のレベルで求められる厳格な温湿度・光管理の重要性が挙げられております。一方で床上展示の場合には、災害時、特に南海トラフ地震による津波が到達する前に安全な場所に移動させられる可能性といった緊急時の対応という側面からのご意見もいただいております。これらの三つの観点を踏まえ、皆様から活発なご意見をいただけますと幸いです。

続いて5ページをご覧ください。周辺施設と連動したコンテンツの打ち出しという委員のご意見を受けまして、門司港の周辺施設だけでなく、埋蔵文化財センターと連携し遺構に関するコンテンツを発信していくことも検討しています。埋蔵文化財センターでは屋外での展示も含め、今後検討してまいりたいと思います。

続いて6ページ目をご覧ください。これまでは展示計画についてご説明いたしましたが、ここからは、複合公共施設には展示しきれない出土品をどのように有効活用するのか、2つの活用案をご説明させていただきます。まず一つ目は関係機関への譲渡もしくは貸与です。譲渡先又は貸与先といたしまして、JRなどの鉄道に関する専門的な研究機関や展示施設を想定しております。活用方法といたしましては、出土品が鉄道の発展や歴史を後世に伝えていくための活用とすることを前提といたします。そのため、譲渡先が勝手に他者に転売したり再譲渡とすることは禁止といたします。また、複合公共施設のオープンに際しては、北九州市と連携し、企画展などを行うこと。そして、継続的に北九州市と連携して企画展を開催することを条件とすることを検討しております。2つ目は公募による譲渡です。こちらは門司区内でまちづくり活動の実績がある団体や大学などの研究機関を対象とした公募形式の譲渡を考えております。門司の発展や歴史を後世に伝えていくために活用することを前提としており、転売や再譲渡は禁止といたします。

資料の説明は以上でございますが、本日、特に皆様からご意見を伺いたい点は3点ございます。一点目といたしまして、誰にでも分かりやすい展示をどう実現するか、特に子どもたちやゼロ知識の方々にも興味を持ってもらい、より多くの方々にその価値を理解していただける展示とするためのアイデアについて、皆様のお考えをお聞かせください。二点目といたしまして、切り出した実物の遺構の床上・床下展示について、遺構の価値の伝わりやすさ、展示空間の演出、遺構の温湿度管理と光の管理、メンテナンス性などの観点から改めて皆様にご意見をいただきたいと考えております。そして三点目は、今回新たに提案させていただきました出土品の有効活用についてご意見をいただきたいと存じます。事務局からは以上でございます。

(座長)

それでは、構成員の皆様から、ご意見を順に伺ってまいりたいと思います。先ほども申し上げましたが、ぜひ忌憚のない率直なご意見を、様々な角度からいただければと思います。

それでは、一番初めにオンラインでご参加いただいている小野田さん、いかがでしょうか。

(小野田委員)

今、いくつか説明あって、最初の、やっぱり青少年や専門知識のない方に対しても分かりやすく説明するということは、なかなか難しいところがあります。特に今回の遺構は、基礎の部分ですので。門司港の駅のように建物が残っていれば、非常に説明しやすいし、一般の人が見てもわかりやすいんですが、今回の遺跡は土の下に埋まっていたものばかりなので、非常に地味で、専門家が見てもよくわからないところがいっぱいあります。例えば木杭やレンガなどの破片がいっぱい出てきて、それが何なのかということを説明するのは専門家でも難しいので。それをうまく説明するために工夫が必要です。

ひとつは、今時ですから、CGとかそういった技術を使って、例えば木片とか木杭が昔どんな状態であって、そこにどんな建物が建っていたということをヴィジュアルでわかりやすく説明できるというのはあるんじゃないかなと思います。今回出土したものは、建物ではなくて、建物の下にある基礎の部分で、その基礎の上にどのような建物があったのか、これは全く想像とか復元にはなりますけれども、それを示すことによって、昔の門司港の駅の周辺の景観が再現できるのではないかと思います。それを見せることによって、見学者もこの建物がここあって、海がこのあたりにあったと、それから、昔ここにあった建物のうち、例えば、門司港駅とか九州鉄道記念館は本物ですが、あとは模型とかジオラマで昔の景色を再現するとかそういったことになるかと思います。プロジェクションマッピングだとかホログラムだとか、いろいろ技術はあると思いますが、どこの博物館だったか覚えていないんですが、ホログラムを使って、ジオラマの模型の上に、人が寸劇をしているところを再現していました。それなりに予算のかかる話ではありますが、どこまでやるかというのは検討次第なんですけれども、そういった展示の工夫は、特に今回の場合は基礎の部分の遺構ということなので、一工夫いるかと思います。

それから、これをどのように活用するかという話なんですけれども、先ほど、ほかの博物館に、譲渡することも考えたいという話がありましたが、案としてはJR系の鉄道博物館ということになるかと思います。ちょうど東京の高輪地区でも、門司港と同じように再開発で遺構を展示するか、残すかという議論を進めて

いるところで、互いにコラボすることもあり得るかと思います。高輪では、早稲田大学の谷川先生が委員長をやっておられて、門司港の遺跡も見たとのお話し聞いているので、コラボレーションして企画展をやるのも一案かと思います。

展示方法は、先ほどお話ししたように一工夫いるというところが、今回の遺構の本質的な価値を示すポイントになると思いますので、そのあたりを意識して議論を進めていただきたいと思います。また、遺産をPRするために、ボランティアガイドが活躍している場所もありますし、パンフレットで案内するだけというところもあります。

(座長)

それでは続きまして、永尾さんの方からご意見をお願いいたします。

(永尾委員)

まず、展示について絞ってお話をさせていただきたいと思うんですが、今回この場所での展示っていうのは一般の博物館で行う展示とちょっと意味が違うんであろうということ、まずは考えるべきかなと。というのは、やはりまず最初に、遺構の保存という非常に大きな課題がありまして。だからこのことにどう答えるのかということが大事ではないか。いろんな土木技術だとか、あるいは門司港の発展だとか、そういう歴史的な、あるいは技術的なことっていうのは、どちらかというとテーマ的な展示になるんじゃないかなと考えておりまして。だからまず一番には遺構の保存関係、これをどう対応する、展示するのかということが、発掘された資料がどこにあったのか。このことをはっきりと示すということが、まずは大事だろうと。そうしますと、例えば遺構模型あるいは写真、こういったものを活用しながら、展示する資料がどの地点で見つかったかということをはっきりと示すというのを、まず私は基本ではないかと思っております。それで、そういったものを使って、次に、門司港の歴史だとか土木技術だとか、これ以外にもいろんなものが出てくるだろうと思いますが、こういったものはどちらかというと企画的な展示。ですから、最初に保存を意識した展示というのは、私は、これは常設展という形で考えております。これは変わるはずがないわけですから。それともう一つ、テーマを使った企画展と。この2本立てが、私は必要じゃないかなと思います。

それで、今日、拝見しました資料の3、ここに展示コーナーがございます。今のところ展示コーナーって書かれてるのはこの一つなんですが、通路を挟んだ向かい側、ここはどういう使われ方するのか分からないんですが、できれば広さが大体何平米あるのかということも問題になるんですが、この展示コーナーと書かれているところが、基本的には常設展示ということで、その向かい側に企

画展示を行う。それぐらいの広さがあってもいいんじゃないかなと。展示コーナーの中だけで常設と企画を両方やるっていうのは非常にきついんじゃないかなと。やはりもっと、この遺構を大事にするということから考えれば、それぐらいのスペースがあっていいんじゃないかなと。この向かい側がどう使う計画にされているか、ちょっと分かりませんので、勝手に上の展示コーナーというところが常設、それで下の方で企画ということをしてはどうかと考えております。常設展示とか企画展示、これは、リピーターということを意識するということだと思いますけども、先ほどの常設のところは、いつ来てもやはり昔ここはこうだったということがはっきり分かる、そういう遺構保存。これを意識した展示ということと考えていただいたらいいんじゃないかなということです。

四枚目の一番下の方の温湿度管理だとか、この辺りで感じたことを申し上げたいと思うんですが、文化財のレベルで求められる温湿度管理となってくると、かなり厳しいところがあるかと思います。私が博物館の現役時代っていうのは、まだ、大体平均して150ルクスぐらいですかね。それでもちょっと明るいかなというところで120ルクスぐらいでやったこともあったんですが、最近の文化庁の指導、特に重要文化財等の展示について、インターネットで調べたんですが、最近はどうも、100ルクスぐらいまで、かなり厳しくやっているみたいですね。それで、浮世絵となってくると、80ルクス以下と。そうなってくると、今度やるところでそこまでやるかどうかっていうところですけども、物を大事にするということであれば、当然それぐらいのことは必要かとは思いますが。そうすると、それを暗いと感じさせない展示技法というのが、当然求められると思いますので。その辺はいろんな博物館が既にやっていることですから、参考にできるかと思いますが、以前、若い方たちが、もう少し明るくして、写真撮ったりしたいっていう話も出ていましたけども、それからするとかなり暗いとおそらく感じるだろうと思いますけども。物を保存ということを考えれば、やはり明るくても150ルクスまでということになろうかと思います。

それからもう一つ、床上展示はどうかということが、意見で出ていたと思いますが、私は、これはちょっと現実的に厳しいんじゃないかなと。というのが、動かすものがかなり重量物だったと思いますので、津波等が来ると非常に大きな災害ということを考えると、まず人間の安全が最優先になると思いますので。展示している資料を移動するってなってくると、そのためにどれぐらいの人間がいるのか、それからそれをどこに移動させるのか、やはり移動するためには、重いですからジャッキ等がついた手押しだとか、そういったものが現実的に可能かなっていうのは疑問に思っています。ですから、むしろ、例えば、地下でもいいんですが、耐震・防水に耐えられるような手当をするという方法を考えた方が。ですから、移動するのではなくて、現地でいかに保全していくかという方法を考

えた方がよろしいんじゃないかなと思います。博物館でも防火訓練等をやりまうけれども、現実には、まず人の移動が優先で失うものはできるだけ動かさない。動かす方がかえって危険だという考え方に最近なっけておりますので。だからいかに動かさずに安全に保全できるかというそういう展示ケースだとか、そういうことが要求されていくだろうと思います。

もう一つ、最後六番目のところで、出土品の有効活用で、関係機関への譲渡もしくは貸与、あるいは公募による譲渡というのがありましたけれども、私は基本的には譲渡っていうのではないと。これはしない方がいいと、私は思っています。貸与というのは結構だと思いますけれども、やはり譲渡となっけると、具体的考えがあるのでしょうけれども、所有権そのものが移ってしまう。こうなっけると、後でいろいろ問題出るんじゃないかなと。公募等によって、この運営等を引き受けてくれるところが出たとして、その機関がどのくらい恒久的な機関なのか、そのあたりが果たして担保されるかということが。途中で投げ出されたら大変なことになるので、やはり、これについては資料は、特に埋蔵文化財というのは国の資料なんでしょう。そしてこれを各自治体が預かるという形が多分基本だったんじゃないかなと思うんですけども。そのあたりもうちょっと確認してからということになりますが、できるだけ、やはり市の方が、いざとなったときにバックアップする体制が必要だろうと思いますので、貸与という形はいいんですが、譲渡っていうのはやめた方がいいんじゃないかなと思いました。

（座長）

事務局お願いします。

（事務局（事業推進課））

まず一点目にご質問がありました、展示コーナーの3枚目の資料の図面、下側のところのエリアだと思います。用途につきましては、基本的にはまだ決まっておられません。これまでの他の区役所の使われ方としては、掲示板を置いて、何かお知らせをするというのが一般的にされている状況でございます。ですので、まだ決まっていない状況の中で今何ができるのかということはずね、今後、このご意見を踏まえて、検討してまいりたいと思います。

（事務局（文化企画課））

埋蔵文化財担当課長でございます。出土品の取り扱いについてご質問があったと思います。発掘調査等て出てきたもの、そして我々が出土品として持ち帰ったものは、所定の手続きを経て、有形文化財の一部として取り扱っているという認識でございます。ただ今回は、レンガであつたり、建物基礎であつたり、発掘調

査の中では持ち帰れなかったもの、現地に残置される予定だったものについて、何か有効的な活用ができないかということで、これを一部持ち帰ってきたというところでございます。今回の出土品の有効活用案に出てくる関係機関への譲歩、もしくは貸与とあるものはこのようなものであって、発掘調査で持ち帰った対象物とは別のものでございます。

（座長）

それでは続きまして、銭谷さん、お願いします。

（銭谷委員）

前回、第2回目で提起しておりましたが、今回展示するにあたって展示場所がどこになるのかというのが問題だったと思っておりまして、当局から1階のロビー案が提示されたということで、そのロビー案というのが、本当にこれで十分対応できるのかと、まず疑問を言っておりましたし、今回、門司駅舎跡の一番肝心なものは、やはり、機関車庫のところだと思います。それで、この機関車庫をどう展示するのかっていうのが一番核心になるんじゃないかと考えておったわけです。それと、今回、新たに南海トラフの津波がどの程度のものか、それはまだ正確には分かってないと言われております。当局の方に聞いても、やはり正確なところはまだという話であったと思いますが、近頃の議会答弁では津波の恐れはないような答弁をされたというようなことを聞きました。本当にそうだろうか、今でも思っております。やはり津波というのは非常に力が強くですね、かなりのところ、損害が発生しておる状況があります。万が一、津波がこの駅舎の展示予定されている1階ロビーのところまで来たら、やはり相当な損害を被るんじゃないかと、そういうふうに考えます。ましてや、図書館ですね。図書館の方はかなりの被害が出るのではないかと。そこに展示するっていうのはいかなものかと、そういう観点から前回話をしたと思うんですけど。その中で、私はやはり、この門司駅舎の核心の部分であります機関車庫。機関車庫があった場所をどのように明らかに示すのかということが肝心かと思っております。前回も、あった場所に、あったものを展示するっていうのは非常に重要ではないかと述べております。それは改めて、今述べているわけです。今回この機関車庫が、なぜ非常に重要かと言いますと、基礎構造にあると思います。軟弱地盤の上に建てなければならない状況下において、どうやってその軟弱地盤を克服して建てるかということに、当時の間組も相当に考えたんじゃないかと。そしてやはり、相当な苦心、苦勞をして建てたのではないかと。そして、その知恵といいますか。軟弱地盤に木杭をたくさん打ち込んで、それも3m以上あるような木杭を打ち込んで、埋め込むというようなことをして、その上に軟弱地盤構造の、特に基礎となる部

分については、江戸時代からの工法である胴木を置いて、胴木上に基礎のコンクリートを打つというような形でやっと建てられた。そういった非常に苦労したのが見えたというのが一番。これをいかに展示するか、できればあった場所で、そのものが展示できれば一番いいのではないかと思います。前にも、若干そういう話をしたと思いますが、今更ながら、そういった、明治の近代化の流れの中で、門司港という街ができたわけですが、門司港ができる前の門司は、やはり普通の村であったわけです。そういったところに、新たな都市が出来上がった。それも非常に短期間で、都市が出来上がったと。そのもとになったのがこの鉄道でありまして、鉄道駅舎であります。鉄道駅舎ができたということと、門司の港と一緒に、同時に造成されたということで、門司港というまちが、短期間で出来る。埋立からわずか10年で門司市が出来上がるといった内容が、今言われておりますが、門司市ができる、その根底にこういった門司駅舎があり、門司駅舎を建てるために非常な努力が必要であったと。もちろん、こういった造成工事そのものもですが、造成工事に至る前の、そういった門司港の開発についてはいろんな方の地元の熱意や、それに携わったいろいろな方の努力、そして特に当時の福岡県令、今の県知事に当たる方の安場さん。それから企救郡長の津田さん。そういった方々の熱意とか、そういったものが非常にあって、そしてその結果、いろんな方を通じて、門司築港会社の資本を出した渋沢栄一さんにつながって初めて、こういった埋め立てができ、駅と門司駅舎ができ、この2つが相まって、今の門司港の形ができたということです。この計画ができるまでに相当な苦労をして、やっと出来上がったものです。特に、安場県令が招いた、内務省のお雇い技師のムルドルさんの設計というのがありますけど、これは岩本さんの論文から出したものですが、これは、当時、非常に高度な技術を用いて設計をされたと聞いております。そういったいろんな方の熱意がこもった場所であるということはいかにわかってもらうのかということも、また一つの大事な要素でもあろうかと思います。できれば、非常に困難な場所に機関車庫を建てたということについての、そういった歴史、克服した技法、そういったものをできる限り、あった場所にあったところで展示をしてほしいというのは、私の今でも変わらないところでもあります。当局としましては、あったところであった場所で展示することになれば、生涯学習センターができなくなると、それは困るというような考え方でおられたと思いましたが、その辺なんとか考え直すようなことはできないのかということも改めてお伺いしたいと思います。門司区の地域の宝というのであれば、地域の宝らしい展示をしていただきたい。そしてそれが地域の誇りとなって後世に伝えられていく、そういったものにして欲しいというふうに思います。今の1階ロビー案だけでは、津波が来たときは、非常に大きな損害を受けるだろうと思われるし、1階ロビー案だけでは展示しきれないのではないかと。

分かりやすい展示をしようとしても、このスペースではとても足りないのではないか。あった場所、あったところに戻す。そこをもう一度検討をしていただきたいと考えます。旧門司駅舎は、今の門司港レトロの原点でもあります。そういった原点ともなったこの門司駅舎、これは門司港の歴史にとって、非常に貴重な場所でもあります。そういった点からも、できる限りあった場所で、あったものがどいう風にあったかというものを展示できないのか、それを考えていただけたらというふうに思います。

それと、今回発掘されたのは、この門司駅舎の関連遺構だけでなく、機関車庫の石炭ガラの廃棄場所のところからは、古代の漁撈用の網の土の錘であったり、古墳時代の須恵器も出ています。平安時代の白磁であるとか、青磁とか、いろいろ出ています。ここが古代からの港であった可能性もあったということです。そういった可能性さえ秘めた場所であったということも合わせて、そういったものが展示できる場所を確保しておくべきではないか。ここは広い範囲から、いろいろな出土物が出ています。そういったものができるだけ分散せずに、展示する場所の近くに保管されることを望みます。やはりその中から企画展をするとか、いろいろなことができると思います。今後、また門司港の近くの発掘が行われた場合、いろいろなものが出土してくればくるほど、門司港の歴史が改めてわかってくるような状況が生まれるのではないかと思いますので、できるだけ発掘された出土品は分散せずに他に譲渡してほしくないと思っております。そこはもう一度考えていただきたいと思います。ぜひ、もう一度あった場所にあったものを展示するという重要な観点から再度、検討していただきたいというふうに私から申し上げて意見とします。

(座長)

それでは続きまして、内山さん、お願いします。

(内山委員)

確認したいことがあってお聞きするのですが、遺構のところは、前は図書館に展示すると見たような覚えがあるんですが変わりませんか。それとも、別に展示コーナーっていうところを設けていますので、そこを予定されているのでしょうか。

(事務局(事業推進課))

図書館に展示はありません。

(内山委員)

聞き違いだったかもしれませんが、図書館って、やっぱり学生たちとか子供とか、たくさん利用される方がいらっしゃるの、遺跡が床下にあるっていうのはある程度意味があるかなというふうには考えておりました。ただ学習するところだとか読書をする場所に設けて、ワイワイ、あれがどうだこうだとか説明の放送があると、やっぱり学習する場所としてはふさわしくないと思っていたんですね。それで、図面を見ますと、展示コーナーとか別に設けられているようですが、希望としては、会長がおっしゃったように、もとあった場所にそのままの遺跡っていうのは誰しもが思ってることだと思うのですが、それは不可能であるという場合でしたら、やっぱり一番大事な部分は取り出してということが考えられると思いますので。その部分の展示っていうのはやっぱり、分かりやすいことが一番必要であると思います。例えば模型でありましたり、写真でありましたり、説明っていうのはそういうものがつきものだと思いますけれど。今だと動く映像でおそらく保管していらっしゃるかと思いますので、そういうもので分かりやすく皆さんに展示するのがいいとは思っております。私が、東北の方を見学したときに、床下にあった展示が大変クリアで、その遺構の上に立つという感動を覚えたので、それは計画の中にもあるようですので、実施していただきたいという気持ちがあります。それがどこの場所にあって、どういう役割をしたかっていうのはただ展示しているだけでは、皆さんには理解が難しいかと思えます。ですので、分かりやすくっていうのがこの中でもテーマになっておりますけれど、映像でありましたり、模型でありましたり、そういうところで、ここですよと、この部分ですというような展示の仕方は必要と思っております。この間も空調のことを申しまして、床下にあった場合、曇ってしまうのではないかという意見も申し上げたかと思いますが、それもできるとお聞きしましたので安心はしておりますけれど。展示物が見えないとか、音でかき消されて説明に他の音が入ったりして、せっかく展示してるものが分からないとか、そういうことがないようにというのは希望の中に入っています。私が見学したときは、三角山から関門海峡に落ち込んだところが昔の海岸線で、そこのところを見た時に本当に感動したんですよ。あれが何か形にできないかなっていう気はして。それで、機関庫もその近くですので、駅舎があって、その横が機関庫ですので、その部分も見せる形ができれば一番理想的ですけど、無理であれば、やはり展示の中でここですよと。で、なぜそれが機関庫と分かったかっていうと、石炭のカスがいっぱいあったとか、そういうものが皆様に分かりやすく伝わるような展示であってほしいと思っております。

公共の場所ですので、多くの方が出入りするの間違いなことですけど。さっき図書館ですかっていうことをお聞きしたのは、その点なんですね。やっぱ

り皆様が見学したり展示したり、「あ、すごいな、これ門司港の一番最初の駅にはこういう施設があったのか」とか、そういった感動をしていただくには、それこそ照明であったり、それから音響であったり、そういうものは見学に邪魔するようなものがないようにというのが希望です。希望だけ申し上げているわけで、これは本当に素人考えかとは思いますが、専門家は勿論、素人の見学が多いと思いますので、素人の感覚は入れていただきたいと、ずっと思っております。

(座長)

事務局、お願いします。

(事務局(事業推進課))

ご質問で、図書館の方に展示ということがございました。第2回の時に、遺構等は展示コーナーの方で展示するんですが、一つの案として、図書館の中に、郷土史コーナーを設ける等がございます。色々伝えていくコンテンツという面では、図書館の中でも、内山様が言われたように、どのような歴史であったのかを伝えていくとか、今からの収集する資料次第だとは思いますが、そのようなコンテンツは考えているということでございましたので、訂正させていただきます。

(座長)

続きまして、松本さん、お願いします。

(松本委員)

今日いただいた資料と前回の資料とを見比べておったんですけども、今日いただいた資料の3ページの平面図は、前回の資料の6ページの絵の場所とあっているんですよね。であれば、今日いただいた資料の3ページの展示コーナーの一番奥まったところが、床下なのか床上なのかはともかくですけど、ここに切り出した遺構を展示すると。それで、その手前の若干のスペースが付随した出土品とか展示物を並べるスペースになると。それで、右に折れて、その壁面がいろんなタイムウィンドウと書いてありますけども、そういうデジタルサイネージみたいなものを駆使して付帯する情報をご覧の方に提供すると、そういうつくりですね。それであれば、切り出したものを展示する場所っていうのは大体ほぼ決まりだということであって、それをどうやって付帯する情報を提供することによって、付加価値を感じてもらえるかと。そのようなことに知恵を出すことが必要なのかなと思います。

そうすると、やっぱり今時ですからデジタルサイネージ。何ページの画像を用意されるかにもよりましようけれども、それによって、豊富な情報を一つの画面

の中で提供できるんじゃないかなと思います。そこも知恵の出し方ひとつだと思います。それをやることによって、この出土品あるいはこの地域が、かつてどんなふうであったという歴史の観点からの情報提供もありましょうし、先ほど銭谷先生からも話ありましたように、切り出した出土物の、軟弱地盤をどうやって補強していく、先人たちは苦労して積み上げて基礎を作ったのか。木杭であったり胴木であったりというものを、グラフィックに展開することで感じてもらえるものは、情報としてはあるんじゃないかなと。限られたスペースではありますので、奥行きを持ったソフト作りができればいいのかなと思います。

そうすれば、複合公共施設全体には、限られたスペースしかないわけですから、そこをどう活用していくかということで、奥行きのある情報提供ができるような工夫が必要なのではないかなと思います。かしこまった情報だけでなく、お子様方にももっと親しんでもらいたいとすれば、そこに一つ、ゲーム的な要素があっても面白いのかなと思います。あるときは、学術的な情報提供の図面であったり、立体的な説明があったりするかもしれませんが。それが今日いただいた資料の2ページ目の右側にあるような子供さんたちが何か驚くようなきっかけづくりになるような、ゲームと言ってしまうえばそうかもしれません。それだけかもしれませんが、楽しめる、手を伸ばしたくなるようなことをこの中に織り込んでいけば、より親しめるものになりやせんかなと、ご説明聞きながら思っていました。

ということで、見やすい表示・分かりやすい表示という意味で、お題をいただいた一つ目は、そのような限られた空間、限られたスペースの活用、工夫次第で、奥行きのある展示をすることで、見ていただいた方が理解できるようなものに作り込むことが肝ではないかなと思いました。展示コーナーに切り出した構造物を展示する、ここはもう決まりだと思われそうですので。これを床上案なのか床下案なのか。先ほど申しましたソフト面を上手に作り込めば、かつて先人たちがこんなに苦労して積み上げた基礎なんだという意味では、今は自分が立っているその位置よりも、もっと深いところまで構造物を積み上げて、積み上げて、やっと基礎ができているんだということでは、床上よりも床下のほうが、実感できるような気がいたします。

親しんでもらう工夫としては、パズルみたいなゲームみたいなことの中に、パズルみたいなものを織り込まれるといいのかなと思います。1番から何番まであるのか分かりませんが、番号を消し込みながら、全部踏破するとか。そういうクイズ的なゲームみたいなものがあるといいかなと思います。チャレンジしてクリアしていくことを、その画面の中で実行できる。ゲームを達成して、もっと詳しいことを知りたければ、郷土コーナーで、もっと詳しい書籍を手にとることができる。そんなことに繋がっていけば、また深まっていくのかなと思います。

そして5ページの同心円で地図をあげていらっしゃいますけども、ここに至るまでには門司港駅もあれば、レトロ地区もあれば、栄町銀天街があり、私のおります九州鉄道記念館もありと。それらをずっとリレー形式でまわせるような、例えばクイズラリーじゃないですけど、街歩きをやる中で、公共施設もそのうちの一つだし、公共施設の中にもいくつかコーナーがあってもいいと思います。それで、その中だけで納めるんじゃないくて、門司港駅もそのうちの一番目か何番目かわかりませんけども、そうやって潰していきながら、街を楽しんでもらう。そのような楽しみのあり方も、ひとつ面白いかなと、資料を見ながら思っていました。

どうやって消し込んでいくのかということですが、何番のところにいけば、今時ですからスマホでかざせば、クイズみたいなのが出ていて、ひとつクリアしていくと。次はどこにあるのと探していくと、今度は栄町にあると。こうやっていけば、まちの中をずっと、それなりに周遊できるきっかけ作りにはなったりするんじゃないかなと。どこそのまちでは、マンホールアートみたいなものもあるじゃないですか。そういうのを門司港駅前からつなげて、門司港のレトロ地区までずっと広げて、次はどんなマンホールのイラストなんだろうと。そういうようなものを楽しみのひとつに提供することも面白いんじゃないかなと思ったりしております。そのようなことで有効活用に使えてくれるのかなと。もちろん鉄道に関することも、出題の中に、それなりのボリュームはあっていいかと思いたすけども、鉄道だけじゃなくて、内山さんがおっしゃってましたよね。明治時代からの歴史もあるでしょうし、銭谷先生のおっしゃったような、そのようなことも織り交ぜながら、まちに深みを持った楽しみ方の提案っていうこともできるじゃないかなと。どうすればいいかっていうのは、まだ、私もイメージはそこまではつきませんが、いろんな角度から楽しみ方の提案ができればいいのかなと思っておりました。整理できておりませんが、そんなことを思ったところでございます。

(座長)

では、小石さん、お願いします。

(小石委員)

私からは観光部局という視点で意見させていただければと思います。観光という視点では、例えば、インスタ映えとか、スポットで写真に撮るという面も一つはありますけれども、コト消費、文化体験でありますとか、現地で歴史を学ぶ、地域の方と交流する、そうしたより深い体験を求められる方も非常に多くなってきたのではないかと思います。今回のご提案をいただきました展示空間も、広く市民ロビーも含めて遺構のブランディングというところで、イメージをあげ

るような作り込みでご提案をいただいているのかなと感じております。

先ほどから意見が出ておりますが、展示コーナーの中に限らず、地域との交流ができ、市民の方もここで見れるということで、遺構のブランディングウォールやデジタルサイネージ、利便施設と幅広くに統一感があるようなかたちで、展示の工夫をされたいのかなと思います。また、来訪者の方はもしかしたら何度も行かないかもしれませんが、市民の方は、よく市民ロビーにおられますので、季節に応じて展示内容を工夫されとか、この地域の団体の方と連携してみたいなことをやってみるとかですね。いつも賑やかとかいうか、何かやってるってようなことが施設の中、先ほど松本館長からもありましたが、地域も含めてここの施設を核の一つとして使える、色々な方が使用できるものになると、本当に門司港レトロ地域は非常に大きな観光名地でありますので、より魅力が高められるのではないかと期待をしております。

ARとかQRとかのデジタル活用もご検討されるということですし、外国語対応も今後ご検討されるということも以前おっしゃっていただけたかと思いますので、利用しやすいとか、理解しやすいといったつくり込みを引き続き検討していただけるとより良いかなと思います。

(座長)

それでは、事務局の方から、本日ご欠席の山田さんと足達さんのご意見を事前に伺われているかと思しますので、ご紹介いただければと思います。

(事務局)

山田様からのご意見でございます。

展示内容の動機付けに関しまして、子ども・無関心層に向けた展示案の立案がなされていくことを有意義に思います。コンテンツの打ち出しを含めて既に方針が立っている①「本施設内の展示による発信」、②「地域施設との連動展示」に加え、③「体験型WS等のプログラム運用」というソフト面の展開を進めて頂けるとな効果的かと思います。ブランディングイメージを生み出す空間を舞台として、知的好奇心が満たされていく素晴らしい機会を1つでも多く実現していきましょう。

切り出し遺構の展示に関しまして、あるべき姿として地上部分に遺構をそのまま保存・展示が可能だった場合を想定すると、これまで指摘されている津波による被害の影響を抑えるためには技術的な検証が多く必要だったと考えられます。これを踏まえ、移設する形にはなりますが床下に設置すること自体は前向きに検討できる内容と考えます。

床下への設置方法は、綺麗な台にただ置かれているだけではなく、地面部分に

発掘によって出てきた煉瓦遺構や遺物、土など周辺環境を再現し、発掘された時に共有された歴史への思いを表現するものになればより魅力的になるかと思っています。床下展示と床面展示の相乗効果を狙いながら、時代性・史実に対するアプローチの一端となることを期待します。

（事務局）

続きまして、足達様からのご意見でございます

2枚目のわかりやすい展示のゲームですが、発掘するよりは、何かを作り上げるコンテンツのほうが、より面白いのではないかと思います。

4枚目の部分ですが、楽しいのは床下展示のほうですが、しゃがんで見ないといけないため、見やすいのは床上だと思います。実際、別の博物館では、子供が走り回っていて、床上の展示は全然見てなかったもので、下にあるだけで子供の興味を引くことができるのではないかと思います。一方で、触ることができるのであれば、床上でも面白いのかなと思いました。

埋蔵文化財センターは駅から離れていて、なかなか行かないと思います。実際に地層の展示もあったので、修学旅行などで人がより多く訪れる、いのちの旅博物館のほうがいいのではないかと思います。

（座長）

それでは、1巡目の最後として、私からコメントさせていただきます。

まず、一点目の誰にでも分かりやすい展示という部分でございますけれども、限られたスペースであるということから、やはりデジタルサイネージを始めとして、そういった機器を使った情報提供の充実というのは、ぜひ行っていただきたいと思いますが、こういった情報提供の弱点として、情報の階層がすごく分かりづらい。どこを辿ればどういう情報があるのかというのが、すごく分かりづらかったりしますし、時系列で物事がどう起きていったかというのが分かりづらいという弱点もあったりするので、そういったデジタル機器を用いつつ、一覧性の高いパネル展示みたいなものを、壁なり、ガラス面なりを使って行っていき、そこにQRコードを貼っておき、スマートフォンなどを通じて、深い情報を見ていくことができるとか、あるいは必要に応じて多言語に対応するとか、そういった仕組みを検討していくということは一つ考えられるのかなと思います。そういった中で、門司港エリアを始めとした周辺の周遊につなげるようなストーリー作りというのもできる可能性はあるのかなと思います。

それから、デジタル機器を使うのであれば、映像を制作するというのはいつの考え方ではないかと思います。その中で、もちろんここでの展示というのは旧門司駅関連遺構ということが中心となるわけですが、いきなりそこからスタ

ートするのではなくて、冒頭数十秒ぐらい使って、古代から近代に至るまでの門司港エリアの歴史を、非常に駆け足な形にはなりますけれども、そのような情報を入れた上で、旧門司駅関連遺構の紹介に移っていくということにすれば、誰にとっても分かりやすいし、より重要性ですとか、あるいは近代より以前にどういうことがあったのかということが、分かりやすくなるのかなと思います。

それから、企画展的なものを行っていくというのは、非常に重要なお提案だと思います。そういった中で、スペースの問題があるということは前提として、学術的な企画展の実施はそれはそれで非常に重要だと考えますが、一方で、多様な方に関心を持ってもらうという意味では、その時に話題になっている、例えば、明治や大正期を扱うような大河ドラマ的なものが放送されている時に、今でも門司港エリアでもそういった企画展とかされているケースあるかと思いますが、そういうものとも連動するような形で、直接的に門司港が扱われているかどうかともかく、時代背景としてこういうことが、その時には門司港エリアではこういうことが起きていたといったようなことが紹介できるような企画展で、少しエンタメ性を持たせるような企画展というのもありかもしれません。もちろん重要なのは、学術的な企画展であろうとは思いますが、多くの人に関心を持ってもらうという意味では、そういったエンタメ性のあるものも一考の余地があるのかなと思います。

二点目の切り出し遺構についてなんですが、その貴重さですとか、価値というのを、多くの方が分かりやすく理解するためには、やはり特徴の1番が断面部分にあると、個人的には考えますので、それを明確に見ることができるやり方が、私としては、望ましいと考えています。写真パネルを見た上で、床下にあるものを覗いて見るというのはもちろん有効な方法ですのでそういうやり方もあると思いますが、その場合は写真パネルをかなり精度の高いものにしてもらうということも必要なのかなと思いますし、床上の場合は、実物を直接見ることができるということで、よりその貴重さというのが実感できるような形で、展示できるような工夫をしていただくということなのかなと思います。

(座長)

1巡1通りご意見も伺ったところでございますけれども、その他追加でご意見、あるいはご質問でも結構ですので、構成員の皆様からご発言がありましたらお願いいたします。では、銭谷さん、お願いします。

(銭谷委員)

今回建てられる予定の総合庁舎の位置は、本当に津波がもう来ないという前提で建てられるのでしょうか。それとも来るかもしれないと考えられて建てられる

のでしょうか。

（事務局）

今年3月の国が発表しました南海トラフ地震による影響ということで、この時初めて津波の影響が今回予定している門司港地域複合施設の方に影響があると発表がっております。これにつきましては今後、県が詳しい調査をしてハザードマップに反映するということでございますが、私どもとしましては、それに至るまでには時間がかかります。今、国が発表している津波を想定して、建物のあり方を考えております。それをもとにいたしますと、2mの津波の想定がありますので、そのことについてどう対応するのかということのをこれまでも考えてきておりました。建物構造上、計算していくと2mの津波に対しては、複合施設の構造的には大丈夫だという確認がとれた状況でございます。以上でございます。

（銭谷委員）

2mという話が出ましたが、来ることもあり得るという想定で考えられていることは分かりました。そして建物自体は問題ないと、建物の強度は問題ないということですかね。

（事務局）

その通りでございます。

（銭谷委員）

この前の東北沖地震の津波ですか。あれで大変な力を持っていると思ったわけですね。そうしますと、津波は万が一でもやはり到達すれば、1階でも相当な被害が出るのではないかと、浸水もあるのではないかと、そういうふうに考えるのですけど。そういったことも考えた上で、今回この展示を1階ロビーでいいというふうに考えているということをおっしゃっているのであれば、どうかなと危惧しているところです。できれば万が一でも津波が到達した場合を想定した方がよいのではないかと。そういった色々な専門家の知識を踏まえて、どういう流れで、どのような力で来るのかとか、専門家の調査をもって、そういったことがあるということをもう一度考え直す。もう1回懇話会を開いていただくとか、そういったことは考えられますかね。津波がどの程度のものがどういうふうに来るということが分かった時点で、再度1階のロビー展示でいいのかということについて、懇話会をやるとか、分かった後でもいいので、専門家の調査とか、そういったものがしっかり出た後でもよいのではないかと。もし津波が到達する可能性があるというのであれば、浸水のことも考えて、やはり被害がでる可能性も高いと思われます。

ので、そういった点をもう一度考えていただいて、津波が到達するということが分かった場合に、再度、懇話会を開いていただきたいと思います。

（事務局（都市再生推進部））

私からお話ししたいと思います。

銭谷さんのご心配ごもっともだと思います。先ほど課長の近松がお話しましたように、今、国が南海トラフの地震による影響というのをお示ししています。そこで今分かっているところと言うと、この門司港地域複合施設を建設するエリア、ここには津波によって最大2mの浸水深があるというのが出ています。これについては、今この津波が明日にでも来るかもしれないということで、私達は速やかに今この事業を計画している以上は、この津波に対して大丈夫なのかどうか検証しないといけません。今のこの時点で、それは検証して、銭谷さんもおっしゃったように、前回の議会でご質問がありましたのでお答えしたところでございます。これは、今の計画している建物が、荷重条件や津波の作用によって建物自体が傾いたり、転倒したり、滑ったりすると色々な事象があります。東日本大震災で皆様目にしたと思うのですが、あらゆる事象に対して、私たちは検証し、今の建物は安全性に支障は認められなかったということで、今の事業は進めたいと思っています。そこはご心配なく、皆様が安心して生活できるように私達は最善の努力をしたいと思います。ただし、浸水に関しては、津波は2mですけども、それ以前に高潮による浸水もあります。それについても以前から3mから5mというのがあります。それに関しては、最大級の高潮による被害、今回のような南海トラフによる最大の被害を私たちは想定した場合に、これは永尾様からもありましたように、とにかくこの最大級のところはもう予測が不可能なところもあります。ですからこれまでの経験上、何よりも人命優先だと、私たちも国も考えております。通常の耐震であるとか、浸水に対しては万全を期すのですが、最大級の災害が来た時には、とにかく逃げることが大事であります。この建物は門司区役所も兼ねております。これは災害時に災害対応の拠点となりますので、ここが潰れてしまったら意味がありませんので、2階以上の上位階に持っていています。そこは最大級の浸水があっても、そこは守れると思っていますし、人の命に関してはとにかく逃げてもらおうというために避難対策、避難誘導についても、危機管理室の方が中心になって今考えているところでございます。津波防災対策に対してはご理解いただきますようお願いいたします。

（銭谷委員）

説明ありがとうございます。今の説明の中でも津波という点については問題があると思います。展示する場所が1階のロビーで津波が来た場合もろに受けるの

で、そういう危惧があると思うので私の方では心配しているわけです。建物自体は問題ないかもしれませんが、展示する場所が問題で、展示場所は本当に大丈夫なのかと、そういったことを私は心配しております。ですから、やはり一刻も早くこの津波に対する速やかな専門の調査を福岡県、海上保安庁辺りが、海流の潮の流れとか、そういうところも関係してくるでしょうから、そういった総合的な調査を早めにしていただきたきたい。ここが本当に展示する場所として大丈夫だということが分かればそれが幸いだと思います。展示場所が1階のロビーということであれば、やはり相当な被害が出る可能性はあるのではないかと、このことを心配しているわけですから、建物自体は確かにもつと思いますのでそれはいいとしても、やはり展示する場所は1階のロビーであるということは、非常に危険性があるのではないかと危惧しているところであります。まだまだ時間があると思いますので、一刻も早く、津波で最大どの程度というのが、専門家の意見や調査、そしてもしもろの関係官庁の調査で分かるようにしていただきたきたい。そしてそれに基づいて、やはり大丈夫ということが分からないうちは、まだまだ検討の余地があるという含みを残しておいていただきたきたいと思います。もし万が一、展示場所の付近が1階ロビーのあたりまで被害が出そうだということが明らかになれば、それはその時に考え直す必要があるのかもしれないと考えておりますので、是非その辺はお願いしたい。

地元の意見として、区役所とか文化ホールとかそういった図書館とかあるのであれば、私達が一番使うところですので、そういった点でやはり津波のことは十分しっかりと分かっておきたいので、早めにそういった具体的な調査の結果を知らせてほしいし、分かりやすく説明していただきたきたい。ですから、もし万が一、図書館の方も津波が来るとかいうことであれば、それは図書館がそこに入るという以前の問題であるし、おそらく12万冊以上の蔵書が水にかぶればダメになるので、失われるということにもなるというところですよ。

この今回の駅舎の跡、非常に重要な遺跡であったというふうに考えております。私自身も第1回目の現地説明会に行きましたし、第2回目も行きました。そしてその現場に行くと非常に感動を覚えました。ちょうど私が吉野ケ里の第1回目の現地説明会に行った時の感動ですかね。それに似た感動を覚えました。それほど価値があったと思います。大変貴重な遺跡だったと思いますので、できるだけあったことが本当に分かる、できればあった場所はここですよって、明示さえできるならまだいいんですが、それすらも考えられてない。そういったことではこれが本当の地域の宝として残るのか。また地域の誇りですね。今後でもできるのかそういったことを思っております。最大限の配慮をしていただきたきたい。生涯学習センターをなんとか考えていただいて、そこを旧門司駅舎跡の展示室にしていいただければありがたい。それぐらいしてもらいたいというふうに願うし、できたら嬉

しいと私自身思っておりますので、是非お願いしたいと思います。

（事務局（都市再生推進部））

銭谷さん、ありがとうございます。これまで計3回、銭谷さんのご意見をお聞きして、本当に最大級の津波のご心配よく分かります。それはもう市民、国民、皆心配だと思います。

私一つ聞いていて思いますのは、100年に一度のそういう大きな災害のまちづくりの話と、今回、遺構を展示する場所として何が相應しいのかというのは、分けた方が整理しやすいと思っています。前者の私達、社会インフラを預かる身として防災対策のまちづくりの話をすると、もちろん100年に1度の大災害に強いまちづくりであるということは考えています。その時はリスクに応じて、何年確率に応じて、基準というのがありますので、それに応じたまちづくりをします。一方で、100年に1回の地震とか台風であるとか、そればかりを注視してまちづくりを常日頃からするわけではないです。1階部分は全部つかるので、全て建物は2階以上にまちを作りたいとか、そういうことはしないです。それはもちろん経験則に基づく、そういうリスクを勘案して100年に1度の場合はこういうふうに対応しようとなります。それから、年間通して豪雨災害もありますけど、いつ来ても災害に対しては万全を期するためにこういうふう基準をもってやりましょうと、常日頃から防災まちづくりをしております。

一方で、今回の門司駅関連遺構で大事なポイントとして、出てくるのは機関車庫の基礎です。これに関しては、皆さん誰も異論はないと思います。その基礎の構造を見ると、陸地にあったもの、海側にあったもので、構造の種類が違っていると、それがこれまでの歴史を伝えているんだということを正確にやっぱり伝えないといけない。今日冒頭にお示ししました第2回のご意見にありましたように、この本質的な価値は何だろうか、時代性とか史実を正確に伝えることが大事ではないか、そこはもう紛れもないと思います。

ただこれを一般の人に伝えるにはどうしたらいいのか、これが伝わらないと意味がありませんので、これをどういう風にお子様から大人でも、知識がゼロの方にどう伝えたらいいのかということで、これまで議論してきたと思っています。それがデジタルであったり、子供の教育のゲーム感覚であったり、今日も色々なご意見いただいたことだと思います。

それから、結局切り出した遺構をどこに保存・展示するのかが、大事なことであると思います。切り出した遺構なので、切り出した以上は、正確にその場所を示してあげればいいのか。今日は、永尾さんの意見もありまして、前回、小野田さんからもそういう意見があったと思います。それを踏まえまして、私達は切り出した以上、最初にあった場所は正確にこの展示コーナーでもお示しして

はどうかと思っています。

あとは1階の使い方、これ前回も私は触れましたが、人がよく歩く、目が届くのは1階であると考えています。観光客の皆様も、それからふらっと来た方も、何よりもこの1階のスペースが重要になるのではないかと今のところ私達はそう考えています。

銭谷様のこれまでのご意見はしっかりと受け止めておりますけども、今の市の考えは以上でございます。

(銭谷委員)

国土交通白書2020を読んでいるのですが、南海トラフ地震の可能性というのは非常に高まっていると書かれております。今100年に1度、200年に1度とかそういった状況ではないような気がします。南海トラフ地震については、マグニチュード8から9クラスの地震の30年以内の発生確率が70から80%。2020年1月24日時点。そんな先の話ではないような気がします。こういった南海トラフ地震について、先の話というわけではなさそうです。そんなに遠い話ではないような気がするというのが私の意見です。今言ったことは、あくまでも国土交通白書2020の中に書かれていることです。いつ来るか分からないという状況ではないです。かなり近いうちに来る可能性が十分あるということを書かれている気がしますのでよろしくお願いします。それを前提として私は話したつもりです。

そういった意味では議論の中で、今回の核心部分はやはり機関車庫の軟弱地盤での基礎構造ですね。この基礎構造は非常に重要であったということは皆さん認識していただけたような気がしています。特に一番最後に分かったことで、造成工事に伴う立会調査という中で、軟弱地盤の基礎構造は、3m以上もあるような木杭を何本も打ち込んで、その上に胴木を渡すことで基礎ができたというような、これは一番最後に分かったことですが、これは非常に重要であったということが共有できたことはよかったかなと思います。是非これを最大の核心的なものとして展示をしていただきたいと思います。

そのためにはスペースも必要だと思います。今回の発掘調査の成果として、是非ともよろしくお願いしたい。私から言わせれば、機関車庫のところにあった門司の最初の水道管というものが出てきました。非常に新しいままの新品のような水道管も出てきました。こういった大型の遺物、そういったものが出てきておりますので、できる限りスペースを取っていただいてそういったものも合わせて展示すれば、より一層明治の近代化の流れというものが分かる。皆さんにやはり感動していただけるのではないかと考えますので、できるだけ広いスペースを取っていただけるように再度私の意見としてお伝えします。

（事務局（都市再生推進部））

私のお話で間違った認識を与えてもいけないので、そこをお話ししますと、私達は南海トラフが、100 年に1度だからすぐ来るはずもない、そんな言い方はしていません。私達は、明日来る、今日この後来るかもしれないという危機感を持っています。この門司港の施設に関しても今来たらどうなのか、この建物は大丈夫なのかということで速やかに計算をしました。そうすると構造の安全性には問題はなかった、支障はなかったという結論を出しております。ただ最大級の災害に関しては被害の大きさがわからないので、とにかく今の段階では人命優先で、とにかく避難も併せて防災対策に努めていくというところです。ですから危機感には常に持っております。

（南座長）

その他構成員の皆様方からご意見はありますでしょうか。それでは本日も様々な観点から多様なご意見をいただき、誠にありがとうございました。事務局、市当局に置かれましては、懇話会で出された多様な意見に関しまして、今後さらに、真摯に受け止めていただいて検討を進めていただき、より良い展示のあり方というものを結論づけていっていただければと思います。それでは進行を事務局にお戻しします。

（事務局）

これまで3回の懇話会を通じまして、貴重な意見をいただきまして、誠にありがとうございます。今回いただいた意見を参考に、市内部で最良の展示方策を検討していきます。その後決定したものを公表する予定でございます。

以上をもちまして、旧門司駅関連遺構等の展示方策等検討懇話会を終わります。